
事業報告

平成14年度
公開講座概要

総合研究所が担当する平成14年度公開講座は、以下の8講座である。①奈良大学文化講座②世界遺産「公開講座」③桜井市生涯学習シリーズ「奈良大学教養講座」④都祁村生涯学習シリーズ「奈良大学教養講座」⑤社会学部公開講座⑥公開講座フェスタ2002⑦こおりやま市民大学⑧生涯学習特別講座

奈良大学文化講座は、近畿文化会との共催事業として23年目を数え、「ものは語る、ものを語る」をテーマに会場を奈良大学にして開催した。受講申込者は、179人で全5回の開催講座に延べ589人の受講生があった。世界遺産「公開講座」は、第2回目にあたり、全6回を開催した。募集方式は、各回毎に募集する個別方式を採用（定員は、100人）し、受講申込者は1,336人で延べ637人の受講生であった。桜井市、都祁村の奈良大学教養講座は、それぞれの教育委員会との共催事業として実施し、地元の希望を尊重し、地域に密着したテーマを中心に開催した。桜井市生涯学習シリーズ（奈良大学教養講座）では、85人の受講申込者があり、全6回開催し延べ受講者数は、280人であった。都祁村生涯学習シリーズ（奈良大学教養講座）では、51人の受講申込者があり、全6回開催し延べ受講者数は167人であった。また、第15回社会学部公開講座は、「大学の先生と考える夏休み＜総合学習＞」を統一テーマのもとに全5回を開催し延べ受講者数は、190人であった。公開講座フェスタは、178人の受講申込者があり、受講者は148人であった。第5回こおりやま市民大学は、全6回開催し延べ受講者数は386人であった。生涯学習特別講座は、会場を本学（総合研究棟、多目的ホール）とし、受講者数は約50人であった。

桜井市生涯学習シリーズ
奈良大学教養講座

－郷土を学び、新しい時代を知る－

6月2日

古代桜井を彩る人々

水野正好

三輪山の西麓、初瀬川と巻向川に囲まれた三角地は今も水垣と通称されている。4世紀初め、崇神天皇の磯城瑞籬宮しみづがきが営まれた地であり、山辺道が南北に縦貫する、有名な倭迹々日百襲媛

や出雲神大物主神が息づく。その北には垂仁天皇の巻向日代宮、景行天皇の巻向珠城宮が営まれ、四道將軍や日本武尊の伝承が絡み合う。磯城瑞籬宮の南面にあった海石榴市は推古朝、隋使斐世清が長途の旅を終え入京する最初の足跡をのこした地、この時、斐世清を迎えた導客使は阿倍臣鳥、安倍に本貫をもつ安倍氏の一人、後、大化改新の新政を推進する重要な人物、左大臣^{あべのくらはしまろ}安倍倉梯麻呂が出るが遡れば安倍大彦命に至る名族である。埼玉県稲荷山古墳発見の剣に大彦命とその系図が金象嵌されていることが判明、大きな話題となった。一方の右大臣は蘇我倉山田石川麻呂、執政のために山田に住まい、山田寺を営んでいる。その死を日本書紀は詳細に記す。桜井の彩りは人々の人生と共にある。

6月16日 **初瀬川の自然と私達の暮らし**
- 清流の復元をめざして -

岩崎敬二

豊かな自然は、私たちの心をなごませ、おだやかな生活環境を作り上げ、子供の情操教育にも欠かせないものです。しかし、20世紀の間、身近な自然は次々に破壊され、美しい川の自然も失われてきました。コンクリートの堤防が、私達と水辺とを遠く隔て、水に対する関心と清流を奪ってしまいました。

21世紀は「環境の世紀」と呼ばれ、自然環境の保護と復元、そして自然と共生できる社会の構築に、世界中から熱い視線が注がれています。その最先端にあるのが、自然を復元させる川作りです。豊かな歴史と風土の中を流れる初瀬川でも、奈良県によってこの「自然にやさしい川作り」が始められています。

この講座では、私が初瀬川で行った調査結果をもとにして、自然を復元する方法や、初瀬川の自然と生物たちの現状を解説します。そして、人間にとって好ましい水辺環境をいかに保護・管理していくかを考えます。

6月30日 **大伴家持と孤悲**

堤博美

過去なくして現在はなく、現在なくして未来はない。この自明の道理を、人はとかく忘却しがちである。だが過去を知らずに現在を知り、ひいては未来の行方を予見することは不可能だろう。されば現在と未来とをより良く生きようと欲する者は、まず何より過去を知るように努めることが、必須にして不可欠ではなからうか。

自己は真に何を愛し、何を求めているのであろうか。この自問は生きている限り、折りにふれ繰り返して意識に浮上し、反省を迫る。しかるにこれは意外に難問である。自ら納得の行く答

えを見付けるのは容易ではない。その時過去がヒントを与えてくれる。過去は古典に生きている。古典は現在の鏡である。

『万葉集』は古典の中の古典である。その古典に学ぶ一例として、それを現在に残してくれた「大伴家持」の人柄とその人生を、この講座の中で、いささか考察してみたい。

9月22日 暦に観（見・視）る自然観と生き方

山田隆敏

なぜ今、暦感覚が必要なのか？暦と現代社会はどう折り合いをつけるのか？

暦の知識は学校教育では明らかに欠落しており省みられていない。家庭教育の分野として位置づけられていると考えるべきである。ここに、暦の必要度を少し考えてみよう。

従来から、日本人の「暦好き」は、四季の変化に富んだ風土や、それに基づく農耕生活、また社会との同一性、均質性を重視する国民性に由来して、家庭で祖父母や両親から子供に口承されてきた文化なのである。また日本の農業は、微妙な季節の変化に対応して高度に発達したものであるために、正しい季節を知るため、昔から暦は欠くことのできないものとして重宝された。

暦には、毎日の生活の指針となるべき事柄、例えば、大安・仏滅・占い・方位・迷信・俗信など当時の日常生活の解説書である。

それでは、現代社会での「暦」の価値をどう観るか。現在多くの人々が関心を抱き、注目している地球環境、生活環境、食物環境、経済環境、家庭環境などから、その答えをだせるのではないのでしょうか。

10月6日 人間のものの考え方の特徴と宗教心

松井春満

人間は主として「言葉」でものを考えます。では感じたことをどういう風に表現するのでしょうか。痛い！と感じて飛び上がったり、きれいだなあ！とうっとり見つめたり、これらは表情や体の動きとなって表れます。また美しいと感じたものを絵にかいたり、感情をこめてピアノを弾いたりします。小さな子供の絵や音楽でも芸術活動の一つです。表情や体の動きはダンスやジェスチャーにつながりますが、これも芸術の範囲に入ります。結局、人間の考えたり感じたりすることは全て「言葉」と「芸術」の活動の中に包摂されているのです。この言葉と芸術の働きをシンボル作用と呼びます。このシンボルの働きがないと人間は感じることも考えることも出来なくなります。

所で、宗教という現象も実は、言葉と芸術の双方に深く関わる人間の心の働きの一つで、全

ての人がその心を保有しています。昔の人を見ると特にそれがはっきりと判るのですが、人間の思考と宗教心の関係を考えてみましょう。

10月27日 **奈良盆地の土地に刻まれた歴史**

森 瀧 健一郎

「歴史」の根底をなす庶民の労働・生活の営みの跡は、「発見」や「発掘」によってしばしば脚光を浴びる古文書や考古資料による解明もさることながら、それ以上に、そういう脚光を浴びることの少ない、ごくありふれた、日常的な景観の中に、潜んでいることが多い。「景観」とは、それぞれの地域の土地自然に住民の生産労働が加えられて形成されたものである。近代以前は、生産労働の主たるものは、農業のそれであった。だから、ここで問題にする「景観」とは、耕地やそれを耕地として機能せしめる灌漑施設を主要な構成要素とするものである。古い時代から農業的開発の進められてきた奈良盆地は、そういう「景観」-現存する耕地や水利施設-を手がかりとして、歴史を探っていくための絶好のフィールドになりうるといえる。ここでは、耕地開発史上重要な役割を果たしたと考えられる狭い谷間の平地に焦点を合わせて、議論を進めてみたい。

都祁村生涯学習シリーズ
奈良大学教養講座

自己実現をはかる生涯教育

5月19日

《大和の歴史・文化》
「没後1100年 菅原道真」

滝川幸司

本年は、菅原道真が大宰府で薨じて、1100年目に当たる。道真は、天神として祀られ、後、学問の神様として崇められるようになるが、彼は、漢詩人としても平安文学史上逸することのできない人物である。そこで、道真の漢詩を読みながら、その生涯を追ってみたい。道真の作品は幸運なことに、彼自身が大宰府配流直前に編纂し、醍醐天皇に献上した『菅家文章』全十二巻が、ほぼそのままの形で残る。また、大宰府での作品も、『菅家後集』として残る。道真の漢詩では、大宰府で読んだ「恩賜の御衣今ここに在り」などの作が有名であるが、他にも、漢詩人としての矜持、学問の家の後継者としての自負、讃岐守として地方官とならざるを得なかった時の失望、配流された大宰府で何とか平穩を得ようとする姿など、生涯その時々的心情が縷々表現される。彼の作品を読みつつ生涯を辿っていく。

5月26日

《人間としての生き方》
「一度限りの人生だから－真の自己の実現を－」

藤掛永良

風雪を侵して開く寒梅や、春爛漫の桜花が、そしてまた、人知れず静かに咲く野の花が誰に教わるわけでもなく、それぞれ独自のいのちの可能性を精一杯に実現するように、人間もまた、独自の成長可能性を自ら実現していく存在である。その可能性も、森田療法の創始者森田正馬は「生の欲望」と呼び、来談者中心療法の創始者ロジャーズは「実現傾向」と呼んだ。そして、ネオフロイト派の精神分析医カレンーホーナイは「真の自己」と呼んでいる。

いずれにせよ、人間が母体を離れて呼吸を始め、息を引きとるまでの一生は自己実現の旅であるといえる。

本講座においては、その自己実現を妨げる基本的葛藤、基本的不安、無意識の防衛といった、こころのからくりを臨床心理学的視点から考察し、一度限りの人生が生き甲斐あるものとなるために何が必要かを共に考える。“生も一度きり 死も一度きり 一度きりの人生だから 一年草のように独自の花を咲かせよう”（坂村真民「一年草のように、」）

8月4日

《大和の歴史・文化》 「東大寺大仏三度の鑄造」

水野正好

聖武天皇は近江紫香樂宮で盧舎那佛の鑄造を開始、しかし平城宮への遷都に伴い紫香樂での鑄造は中止、新しく現在の大佛殿の地で大規模な造営を開始、この寺を日本の総国分僧寺とし、改めて盧舎那佛大像を造建しはじめる。生活にあえぐ人々や世に見捨てられた病人などの救済に当たっていた行基を信頼した天皇は、盧舎那佛大像を始め東大寺の造営を依頼、苦心の中で造営は進捗、行基没後、752年大佛開眼の盛儀が開催される。1180年南都を攻めた官軍平家は東大寺に放火、盧舎那佛を始め中枢部の堂塔を焼失させる、平家滅亡の契機となる事件である、後白河法皇、源頼朝の支援の許で再建に当たるのは俊乗房重源、陳和卿や尹行末など宋人技術者を据えての作業で旧規の復原に成功する。この像は1567年大佛殿に陣を置く三好筒井軍を攻めた松永久秀軍の放火で再び焼失、その再建は道安の仏体銅板貼り作業で、一旦復原されたが大仏殿の建立が果たされなかったこともあり次第に破損、1692年公慶上人の手で再興された。三度の鑄造の苦心の程をじっくり聞いていただきたいものである。

8月18日

《人間としての生き方》 「人生80年－おかしげな時代を生きる－」

小泉泰一

とにかく「おかしげな時代」に私たちは生きている。私たちを取りまく社会情勢は、国際化、情報化、都市化、高齢少子化、核家族化、経済の混迷等々、急速であり複雑であり怪奇でもある。私たちを含め、私たちの子や孫も、まさにそんな社会をこれから生きていこうとしている。

一個の人間として“ゆりかごから墓場まで”それぞれのステージで、そこに居場所があり、生き甲斐があり、明日への希望と展望があればどんなに素敵なことか。

人生80年を4分割して考えてみるのはどうだろう。子どもは子どもの立場で、熟年は熟年としてそれぞれのライフステージをロマンと意欲をもって大事に構築していきたいし、複線人生ということも考えてみたい。

人生80年。このおかしげな時代をたくましく生きていくためにひとあじ違った視点で一緒に考えてみましょう。

11月10日

《時事・国際問題》
「パリの遺跡と建物－奈良と比較しながら－」

田 中 良

パリ市は東西12キロ、南北9キロで、現代の奈良市の約半分の面積にすぎない。その決して広くない空間のなかに、歴史的建造物が満ちあふれている。様々な時代に様々な建物が建てられ、それらにははっきりと時代の刻印が押されている。そうした建造物が同時代の中で、静かに共存しているのがパリである。

数世紀にわたってフランスの、さらにはヨーロッパの首都であり続けたパリという都市の身分証明とも言える。1～2世紀に造られた古代ローマの遺跡もあれば、現代の文化を集約したポンピドゥー・センターもある。教会の権威を象徴するノートル・ダム寺院がある一方で、ナポレオンの権力を現在なお彷彿とさせる凱旋門が聳えている。また中には、エッフェル塔のように、建設当時轟々たる批判的になりながら今やこの都市のシンボルになっているものもある。つまり歴史的建造物を見て回ることは、パリの歴史をたどることでもある。そのささやかな旅に出発してみようと思う。

11月24日

《時事・国際問題》
「中国は日本に何を求めているのか」

蘇 徳 昌

中国の国父である孫文の秘書を長年努めた人に戴季陶という人がいる。彼は後に蒋介石の思想的支柱になり、国民党政権の5本柱の1本になった。彼は100年近く前に、日本と中国はアジアで覇権を争うことになる。歴史的にみて、中国は「南進」で拡張して来たのに対し、日本も南進、海の方に行くのであれば、成功するが、現実には「北進」、大陸へと歩を進めている。最後は、絶対に惨敗するであろうと予言した。国民党政権は彼の主張に基づき、日中戦争勃発前までは、対日不宣戦の不抵抗政策を採り、勃発後は全面的抗戦に転じた。共産党は始めから徹底抗戦の姿勢で、戦後、政権の座に就いてからの対日政策は、知識人No.1の郭沫若の絶大なる影響を受け、国民外交・中日友好を高らかに唱えながら、政治的に是々非々で、牽制し、経済的に日本をフルに利用し、日本に追い付き、追い越し、アジア随一の大国になろうとしている。

奈良大学文化講座

ものは語る、ものを語る。

9月21日 「笙（しょう）と竽（う）」

笠 置 侃 一

東大寺大仏殿正面の八角燈籠の音声菩薩は、長い吹口のついた笙を吹いておられる。同じように中国の敦煌・莫高窟の壁画にも、みな長い吹口が描かれており、奈良・正倉院にある笙にも、やはり吹口が保存されている。そのうえに、現在雅楽で使われているものよりも、かなり大きいものがあり、それぞれ吹口ともに保存されている（笙3口、竽3口）。このうち、笙の倍ほどもある大きいのを竽（う）というが、今回はその笙と竽についてお話ししたい。

竽は一般の笙より音が1オクターブ低く、他の楽器とともに合奏されていた。しかし平安時代初期にはもう使われなくなって現代では笙だけとなり、更に長い吹口もなくなってしまった。かつて1988年8月、法隆寺の僧侶と（社）南都楽所が敦煌・莫高窟に飛天の供養法要をすることとなり、その時莫高窟で発見された琵琶譜によって編曲されたのが雅楽曲「傾盃醉舞楽（けいばいすいきょうらく）」である。その後、私が正倉院楽器にならって吹口もそなえた笙・竽を復元して奈良次代、つまり唐代の音楽を再現したのが今日、最後に演奏する曲である。

一方、春日若宮神殿から発見された笙は保延3年（1137）に藤原忠実が奉納されたとされる。この笙の指孔が正倉院のものと類似しており、正倉院以外では最古とされる平安末のものとして、指孔の位置関係が異なり、楽器史上非常に興味深いものとして注目されている。

9月28日 「陶器作りのはじまり」

植 野 浩 三

今日、食卓で使用している茶碗や皿は江戸時代から作られ始め、それ以前はややごつごつした陶器とよばれるものが主流でした。

焼物を窯で焼く陶器は、古くは中国の紀元前までたどれますが、日本では5世紀の初め頃に朝鮮半島から伝わりました。須恵器という焼物です。須恵器は大型の窯で高火度焼かれ、大量生産ができます。

初現期の窯は、北部九州と中・四国のごく一部、そして大阪平野の周辺地域に築かれ、その後、大阪の陶邑窯跡群が主流になっていきます。そして、5世紀の半ばと末頃の2回に分けて陶邑窯から各地方へ拡散して地方の窯が成立していきます。

この拡張は偶然ではなくて、中央から地方への手工業部門の分配といった性格が強く、遠く

は九州や東北地方まで及んでいます。5世紀代に現れる「倭の五王」は中国との交渉を盛んにすすめて政治的な関係を強化する一方、倭国内の秩序も整えていったと言われています。そうした手段として須恵器生産も利用されたことが分かってきました。手工業部門をどのように掌握するかは、5世紀代の中央政権や有力者、そして地方首長にとっても重要な事項であったようです。

奈良県は非常に窯の少ないところで、全国的に見ても特異な地域です。それは政権のお藤元として存在した地域の特色といえるのです。

10月5日 「奈良東大寺大仏三度の鑄造」

水野正好

聖武天皇は河内知識寺にあった盧舎那仏像を見て以来、「鎮護国家の仏」として本像を造建したいと念願してきた。都を平城京から難波宮、そして恭仁京を経て紫香楽宮に移す中、この紫香楽宮で盧舎那大仏造建を発表。天下の富、天下の勢をもってこれを造ろうと決意する。時に天皇は行基にも支援を求め、行基も多くの人々を誘い、積極的に参加。体骨柱が建ち始める。ところが紫香楽宮周囲の放火で天皇は平城京還都。結果、盧舎那大仏も平城京外接地にうつして造建されることとなる。工事の進行の途次、行基菩薩は死去、開眼供養は孝謙女帝・菩提遷那の手で行なわれ、聖武天皇・光明皇后はその栄誉の日を多くの官人や救済をうけて来た人々とともにうけることになった。やがて、聖武天皇の死に伴い東大寺建設は一層加速、また光明皇后は国家珍宝帖、種々葉帳など多くの天皇遺愛の品を寄進し、ここに東大寺の大容量は完成した。その後、治承4年12月、平家の放つ火は般若寺、興福寺と共に東大寺に及び盧舎那仏焼損、大仏殿など焼失の事態を生んだ。この復旧作業は重源上人の熱意と入宋三度の知識に導かれ、陳和卿・尹行末ら宋の工人の主導で進められる。大仏完成後の大仏殿復興に引きつづき各建物が築かれた。のち、筒井順慶・三好三人衆などのこもる大仏殿を松永久秀軍がせめて引火、忽ちに大仏殿は焼失、大仏も痛く焼損した。この際の復興は道安による銅板による仏体の復興となり、時間の経過とともにその痛みが表面化すると、東大寺公慶上人が頭部を鑄造、胴部にとりつけて体を為したという。今日見る盧舎那仏像がそれ。こうした復興の歴史をたのしく語りたいと思う。

10月12日 実験歴史学の試みとその成果

—お伊勢まいりとからくり玩具—

鎌田道隆

奈良大学に着任して、学生たちに江戸時代のことを話しはじめてからしばらくして、異和感

に気づいた。学生たちの現在の生活と、研究しようとする江戸時代とがあまりにもかけはなれていること。江戸時代だけではなく、明治も大正もそして昭和20～30年代の社会も、学生たちの生活環境から消えてしまっていたのだ。歴史について学んで、頭では理解しようとしているが、ほんとうはわかっていないのではないか。それでは歴史学の研究から、喜びや苦しさや悲しみなどの感動を学ぶことができないのではないかと考えて、すこし体験的な学習法・研究法をとり入れてみることにした。はじめは、江戸時代の奈良や大坂で栽培されて庶民の経済生活に大きな変化をもたらした木綿（綿花）の栽培実習から始めた。木綿はまた日本の産業革命前夜のマニファクチャアの代表でもあり、江戸時代の農村と都市を考える貴重な資料である。それから、江戸時代のおもちゃとあそびの復元研究と、江戸時代の庶民の旅の代表ともいえるお伊勢まいるの体験旅行の共同研究をはじめた。木や竹や紙などの自然素材を使って、人間的なアイデアと手工芸的な技術を加えて、江戸時代の人々がすぐれたカラクリおもちゃを数多く作っていたことを発見した。また伊勢まいるの復元研究では、ワラジづくりからはじめて、旅の衣類や道具の調達、旧街道の調査など、年々調査テーマを加えながら、奈良大学から伊勢神宮まで140kmを4泊5日で旅することすでに17回。そうした実験歴史学の試みの成果について報告したい。

10月19日 「**版木（はんぎ）と版本（はんぼん）**」
－『おくのほそ道』を中心に－

永井一彰

近世（江戸時代）は版木による整版印刷が一般的に行われていました。版木には、版本からは絶対にわからない印刷現場の情報が満載されています。近世の出版研究の行きつくところは版木であると言っても過言ではありません。10年程前からは私は版木の学術的価値に注目し、収集、調査研究につとめて来ましたが、そのプロセスで『おくのほそ道』『奥細道菅菰抄』『冬の日注解』といった芭蕉関係の版木も発見することが出来ました。

今回の講座では、実際にそれらの版木を御覧いただくと共に、版木の作り方・印刷方法・版本の製本の仕方など基礎的なことについて解説した上で、芭蕉関係の版木の伝来経路を追跡することによって、そこから浮かび上がって来る近世の京都の本屋のありさまをながめてみたいと思います。

「芭蕉」と言ういわば利権をめぐる、近世の本屋たちはどのようなドラマを展開していたのでしょうか。

平成14年度 第2回 世界遺産「公開講座」

テーマ：世界遺産のある風土

回	開催日	講師	演題
1	平成14年 5月26日(日)	奈良大学名誉教授 笠置 侃一	奈良の世界遺産と雅楽
2	平成14年 6月30日(日)	奈良大学文学部文化財 学科教授 水野 正好	「世界遺産古都奈良」と「なら町」と
3	平成14年 7月28日(日)	奈良大学文学部国文学 科助教授 上野 誠	万葉びとの都・平城京
4	平成14年 8月25日(日)	奈良大学文学部史学科 教授 寺崎 保広	藤原京と平城京
5	平成14年 9月29日(日)	奈良大学社会学部人間 関係学科教授 桂 良太郎	「共に生きるまちづくりをめざして！ -ゆめ・ゆとり・ゆうき-
6	平成14年 10月27日(日)	奈良大学文学部国文学 科教授 浅田 隆	風土と世界遺産

平成14年度奈良大学社会学部公開講座報告

【概要】

本年度は、以下の通り、2つの公開講座を開催した。

第1に、「大学の先生と考える夏休みの〈総合学習〉」の統一テーマのもとに、以下に示す3回の講座を開催した。本講座は、昨年度に引き続き、外部機関（「大阪市立難波市民学習センター」）との共催事業とした。その結果、交通至便の地（難波）に会場提供を受ける等の協力を得た。こうした運営によって、本年度も、昨年度に引き続き、多くの参加者を得て大変な盛会となった。

第2に、「奈良発・マーケティング」と題した一連の講座を、「奈良マーチャントシードセンター」との共催事業として実施した。本講座では、その一部を大学における通常のゼミナールとの相互乗入れ形式で行ったこと、さらに、2002年12月に本学で開催された「タウンミーティング・イン・なら」において、その成果を公表したことなど、運営面でもこれまでにない形態を取り入れた。本講座も、多くの参加者を得て大変な盛会となった。

さらに、2つの公開講座の概要をとりまとめた小冊子（『おもしろ講座 大学の先生と考える〈総合学習〉』）も、2003年3月末に刊行された。

【講座1】大学の先生と考える夏休みの〈総合学習〉

〈第1回〉

テーマ：文化人類学をヒントに、韓国についてもっと知ろう

講師：芹澤知広（社会学部助教授）

日時：8月2日（金）15時00分～17時00分

場所：大阪市立難波市民学習センター

参加者：40人

内容：文化人類学や韓国を題材にした「総合学習」をテーマに、ワークショップ形式での講座が行われた。前半には、「文化」の概念について、参加者との質疑応答を交えながら、2002年に日本で行われた2つの韓国文化展を例にしての講義が行われた。後半には、ソウルを目的地にした日本のバックツアーのパンフレットを、参加者が班ごとに分かれて分析することで、「文化の表象化」の問題を具体的に考え、その後全体のディスカッションが展開された。

〈第2回〉

テーマ：心理学をヒントに、ケータイについてもっと知ろう

講師：矢守克也（社会学部助教授）

日時：8月5日（月）15時00分～17時00分

場所：大阪市立難波市民学習センター

参加者：35人

内容：まず、ある大学生が2週間の間にやりとりしたケータイメールの数（500件ちかくに上る）や、その内容の分析をとっかかりとして、ケータイを用いたコミュニケーションの社会心理学的特徴に関するレクチャーが行われた。次に、小グループに分かれ、ワークショップ形式で、「ケータイを使ったコミュニケーションのいいところ／悪いところ」をテーマとしたディベートを展開し、ケータイに関する理解を深めた。

〈第3回〉

テーマ：マーケティング論をヒントに、コンビニについてもっと知ろう

講師：清水信年（社会学部専任講師）

日時：8月8日（木）15時00分～17時00分

場所：大阪市立難波市民学習センター

参加者：25人

内容：コンビニを研究の対象としてとりあげることの意味とポイントについて講演した。コンビニは若者の生活に欠かせない存在であるというだけでなく、その企業規模などの点でもわが国の経済にとって重要な存在となっており、それは店内の惣菜売り場やレジ、配送トラックなど普段目にする事ができる光景からも観察することができることを解説した。受講者からも、盛んに意見や質問が出されディスカッションが行なわれた。

【講座2】奈良発・マーケティング

テーマ：講義「奈良発・マーケティング」

日時：

①6月7日（金）18時～21時

②11月29日（金）18時～21時

場所：ならマーチャント・シードセンター

参加者：

①60人（学生を含む）

②30人（学生を含む）

内容：社会学部清水ゼミを一般に公開し、一般の方と学生とが半年間共同で研究を行った。まず6月にイベントで文学部上野助教授、社会学部矢守助教授、社会学部清水講師による講演を行い、奈良においてマーケティングの問題を考えることの意義について参加者とディスカッションを行った。そのイベントの参加者に対し公開ゼミへの参加を募り、希望した15名の一般の方と清水ゼミ2回生とが共同で奈良のマーケティング問題について半年間の研究活動を行った。そしてその成果について、11月のイベントを「最終報告会」として披露した。

公開講座フェスタ2002

－阪神奈の大学が智力を結集したりレー講座－

テーマ：阪神奈・日本・世界－時が動く、人が動く、歴史が動く－

場所：大阪府立文化情報センター

11月29日 大峰修験の開祖役の行者と近代文学

浅田 隆

紀伊半島の屋根大峰山脈。古代以来の信仰を守る修験者（山伏）たちは、今日も1500米を超える山々を駆け巡る。その大峰修験の開祖が役の行者。信仰や伝説の形成過程をたどり、近代文学に描かれた行者像も紹介したい。

「第5回こおりやま市民大学」

テーマ：「歴史・文化や今日的課題に学び、21世紀を夢と希望に満ちた人生に」

回	開催日	講師	演題
1	6月8日(土)	教授 水野正好先生	筒井順慶と中世大和の考古学
2	6月15日(土)	教授 灰野昭郎先生	漆器はなぜジャパンと言われたか
3	6月22日(土)	教授 大村喬一先生	外から見た日本
4	6月29日(土)	教授 田中文憲先生	日本経済は大丈夫か
5	7月6日(土)	教授 浅田 隆先生	折口信夫『死者の書』をめぐって - 中将姫信仰をからめて -
6	7月13日(土)	教授 鎌田道隆先生	江戸時代における古代復興

平成14年度 生涯学習特別講座

日時：平成14年6月29日(土) 10:20~12:00

場所：奈良大学(総合研究棟、多目的ホール)

演題：「近世大和の旅と街道」

講師：鎌田道隆教授(奈良大学文学部史学科)